




琉球大学学術リポジトリ

ペラグラ患者病変皮膚におけるランゲルハンス細胞の消失

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2016-08-16 キーワード (Ja): キーワード (En): pellagra, niacin, Langerhans cell, photosensitivity 作成者: 山口, さやか, Yamaguchi, Sayaka メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34905

(別紙様式第 7 号)

論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	山口 さやか
論文審査委員	審査日	平成 28 年 5 月 25 日	
	主査教授	吉見 直己 	
	副査教授	松崎 吾朗 	
	副査教授	山本 秀幸 	
(論文題目)			
Depletion of epidermal Langerhans cells in the skin lesions of pellagra patients			
(ペラグラ患者病変皮膚におけるランゲルハンス細胞の消失)			
(論文審査結果の要旨)			
1. 研究の背景と目的:			
<p>ペラグラはニコチン酸などの欠乏による皮膚炎・下痢・認知症を主症状とする疾患である。遷延する光線過敏性皮膚炎を生じるが、その機序は不明である。ペラグラに類似した栄養障害性皮膚症に、亜鉛欠乏による腸性肢端皮膚炎、グルカゴノーマに合併する壊死性遊走性紅斑などがあるが、近年、腸性肢端皮膚炎と壊死性遊走性紅斑の皮疹部でのランゲルハンス細胞の消失が明らかになった。一方、最近の研究により、ランゲルハンス細胞は、抗原提示細胞として皮膚炎を惹起すると考えられるのみならず、皮膚炎を抑制、沈静化する機能も示唆されている。</p> <p>本研究では、ペラグラ患者の病変皮膚において、ランゲルハンス細胞を含む樹状細胞群の出現とその変動を皮膚炎の活動度を基盤として評価・検討した。</p>			
研究結果:			
<p>ペラグラ 7 症例を、病理学的所見より軽症・中等症・重症の 3 群に分け、ランゲルハンス細胞、真皮樹状細胞等の細胞数を、特異的マーカー抗体を利用し、免疫組織化学的な陽性細胞として測定し、3 群における変動を正常皮膚と比較検討した。</p> <p>ペラグラの病変部のランゲルハンス細胞は病理組織学的所見の重症度と相関して著明に低下し、重症例の一部では完全に消失していた。一方、真皮においては、樹状細胞や肥満細胞は正常皮膚との差異はみられず、真皮 CD14 (真皮樹状細胞、単核球マーカー) 陽性細胞はペラグラ皮膚で増加していた。重症ペラグラ症例のうち 1 例で、毛包間表皮のランゲルハンス細胞が完全に消失し、毛包上皮にのみわずかに細胞が残存していた。ペラグラ病変部と非皮疹部皮膚との連続的な組織観察では、病変部ではランゲルハンス細胞が消失していたが、非皮疹部では残存した。</p> <p>この結果は、以下のように考察された。すなわち、健全な皮膚では、紫外線暴露など外界からの刺激により、活性化されたランゲルハンス細胞は表皮直下のリンパ管を經由し所属リンパ節へ遊走し、新たなランゲルハンス細胞は真皮から毛包上皮を介して直ちに表皮へ供給されると考えられている。一方、ペラグラ病変部皮膚では、ランゲルハンス細胞のみが著しく減少、消失していたが、隣接する非皮疹部皮膚では健全部位と変わらず残存していたため、ペラグラにおいてはニコチン酸など栄養素の欠乏により何らかの機序でランゲルハンス細胞の真皮からの供給が障害され、ランゲルハンス細胞は減少し消失し、ランゲルハンス細胞が担う炎症反</p>			

応の収束機能が働かず、一度生じた日光皮膚炎などの一次刺激性皮膚炎が遷延化し、表皮壊死など激しい皮膚炎が生じると論じた。

2. 研究の意義と学術的水準：

未だペラグラでの光線過敏性皮膚炎が生じる機序は不明であるが、症例数は少ないものの、今回、世界に先駆けてペラグラ病変部位においてランゲルハンス細胞の減少、消失する現象を示した。このことは、皮膚炎症状の機序解明の一助になる点を含め、ビタミン群や微量元素などの栄養素の欠乏がどのように生体に影響を及ぼすのか等、今後の臨床皮膚科学の研究に大いに貢献できるものと考えられた。

以上の結果から、本論文は学位授与に十分値するものと判断した。

- 備考
- 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。
 - 2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。
 - 3 *印は記入しないこと。